

争論

インターネットはどんな「つながり」を紡ぐのか？

1. インターネットが築く社会関係資本の課題と展望

柴内 康文

2. ネットが深めた「つながり」の問題と今後への期待

土井 隆義

インターネットという新しい技術が普及して早 20 数年。普及が始まった当時と比べると、私たちの日常の風景もずいぶん様変わりした。「電話」は固定電話ではなく携帯電話を意味するようになった。待ち合わせの際も、事前の約束は「新宿駅で」「梅田で」程度で済まし、当日に「どこそこにいるよ」とやり取りする。「手紙」ではなく、「メール」が企業間でも個人間でも連絡の主たる方法となり、時間と空間を飛び越えるソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS) は、人々の「つながり」をより強固なものに変えている。

その意味で、多くの人にとっては以前よりも「つながり」を実感する機会が増えていてのではないだろうか。「人情味が薄くなった」「他人への関心が弱まった」といわれながらも、私たちは日々、以前とは比べ物にならないほど、他人との密で頻繁なやり取りを経験している。

しかし、こうした変化は、果たしてインターネットの普及した当時に考えられていた未来なのだろうか。また、インターネットによって「つながり」が深まることで、逆に「つながり」をしんどいと感じるときがあるのは、何故だろうか。

『くらしと協同』2017 年秋号では、インターネットと「つながり」に焦点を当て、協同組合だけでなく、私たちが生きる社会そのものにまで視野を広げて考えたい。そのため争論では、インターネット、そして人々のつながりを意味する社会関係資本に注目してきた柴内康文氏と、ネット社会に生きる若者たちに焦点を当て、研究と啓発を進める土井隆義氏に登場いただいた。

期せずしてお二人からは、インターネットが紡ぐつながりの問題点、そして期待が重なり合うように語られた。「争論」というには遠い構成となったが、それは人々のつながりにおいてインターネットが果たす役割が、これほどになく大きいということの証左なのかもしれない。ぜひお二人のインタビューを通じて、その広がりを感じていただくとともに、自分たちはどうすべきなのかを考えていただきたい。

(本誌編集委員 加賀美太記)